

4. さぐってみよう昔の暮らし^{むかし}



貝塚

食べ終わった後の骨や貝殻など、使えなくなった石器などが発見され、当時の生活の様子を知ることができる遺跡です。



民俗資料館の石器

1 室蘭のむかしむかし

現在、北海道にはおよそ540万人、私たちの室蘭市は市民およそ8万4千人が生活しています。私たちの住んでいる北海道や室蘭には、いつ頃から人々が住み、どのような生活をしてきたのでしょうか？

やすこさんたちは、陣屋町にある「室蘭市民俗資料館^{いせき}」を見学し、むかしの遺跡や歴史などを調べてみることにしました。

(1) 縄文人^{じょうもんじん}の暮らし

室蘭周辺^{しゅうへん}に人が住みはじめたのは、その生活のあと（遺跡）として市内で一番古い絵鞆遺跡から、約7千年前と考えられています。土器や石器、骨格器^{こつかく}、などの生活道具と思われるたくさんのかげらや住居跡^{じゅうきょあと}が見つかり、貝塚からは食べものにした魚や貝、動物の骨がでてきました。また、当時のお墓^{はか}もみつきり、人骨がほり出されています。

年 代	時代名	室蘭の近くの主な遺跡 ^{いせき}
7000年前 ～2000年前	じょうもんじだい 縄文時代	えとも しやくづ もとわにし わにし わしべつ 絵鞆、祝津、本輪西、輪西、鷺別など
2000年前 ～1300年前	ぞく 続縄文時代	えとも しやくづ もとわにし わにし わしべつ 絵鞆、祝津、イタンキ、鷺別、大黒島など
1300年前 ～800年前	さつもん 擦文時代	ふなみ 絵鞆、舟見町など
800年～	アイヌ文化時代	ますいち さきもり 絵鞆、増市、崎守など

今からどれぐらい前の遺跡が、どんなところにあったのかをまとめた表

それらを調べることで、当時の人々のくらしや文化などをはかり知ることができます。また、そのころの室蘭地方の気候や地形なども知ることができる手がかりとなっています。

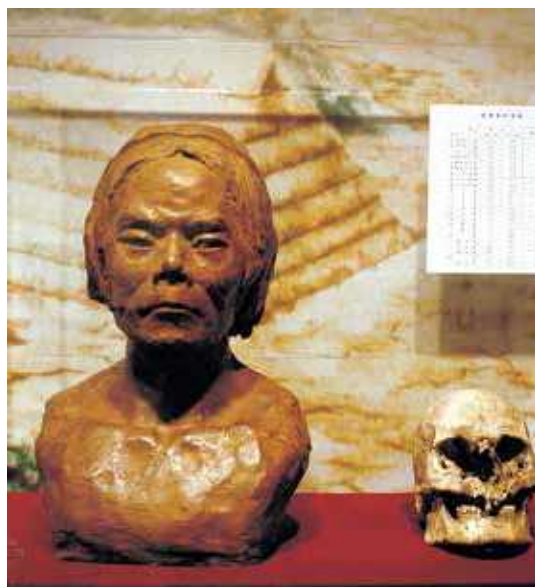
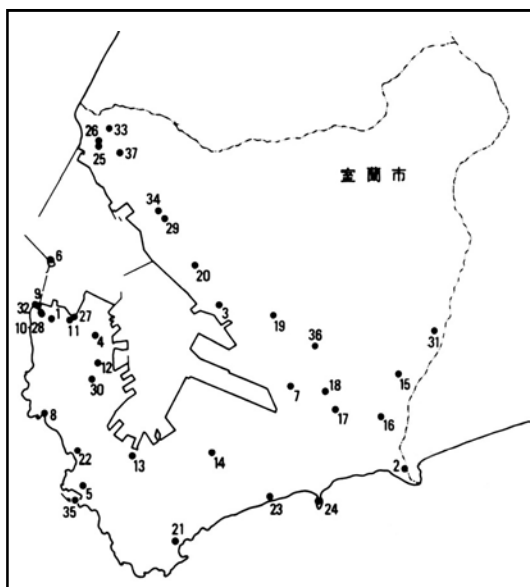
輪西遺跡からは、今から3千年ほど前の縄文時代に作られた土偶が発見され、東京の国立博物館に保存されています。

また、絵鞆の遺跡からほり出された頭蓋骨にもとづいて復顔された、およそ2千年ほど前の続縄文時代人の頭像が民俗資料館に特別展示されています。

市内には、37の遺跡があり、そこからは縄文時代やそれに続く時代の様々な文化遺産が見つかっています。しかし、現在は住宅地や道路などになっていて、見ることができない遺跡があります。

土偶

人のかたどった人形のようなもので、当時の人々の願いごとや、お祈りやおまつりに使用されたと考えられています。何に使われたのかは、まだよく分かっていません。



室蘭市内の遺跡の地図と復顔された続縄文人の顔

アイヌ
「人間」という意味
のアイヌ語で、和
人のことは、「隣
人」という意味の
「シサム」とよんで
いました。



チセ（家）のもけい

(2) 北海道先住民（アイヌの人たち） のくらし

北海道には和^わ人^{じん}が本^{ほん}州^{しゅう}から移^い住^{じゅう}する以
前から、自然の神々（カムイ）に感^{かん}謝^{しゃ}し、
自然からの恵みを大切にし、共^{きょう}存^{ぞん}の心を
ほこりにするアイヌの人たちが住んでい
ます。

北海道の豊^{とく}かな自然の中で、独自の文^{ぶん}化^{くわ}を築^{きず}いてきたアイヌの人たちの、生活
や心の世界を調べてみましょう。

アイヌの人たちは、サケを食料にして
いたので、卵を生むために流れをさかの
ぼってくる川岸や海岸に数けんほどが集
まり集^{しゅう}落^{らく}（コタン）をつくって生活して
いました。知^ち恵^えと経験のあるものが村長
となって人々をまとめていました。



コタンのようす（想像図）



アイヌ民族の
アイヌの人たちが使った着物や道具

狩りの得意な男たちは、野や山でクマやシカ、キツネやウサギなどの野生動物を、川や海ではサケなどをとっていました。

一方、くらしを守る女たちは、木の実や山菜^{さんさい}を採ったり、野草のウバユリの根からでんぷんを作ったり、畑でアワやヒエなどを栽培^{さいばい}し、それを粉^{こな}にしてつくったおかゆやだんごを食べて生活していました。

アイヌの人たちは、とった獲物^{えもの}などを、神からいただいたもの^{かんしゃ}と考え、大切にするとともに、自然への感謝の祈り^{いの}をいつも忘れませんでした。

アイヌの人たちは「アイヌ語」を話していましたが、それを書き残す文字をもっていませんでした。しかし、祖先からのくらしの知恵や教え、伝説などを語り伝えること^{でんせつ}によって記憶^{きおく}し、アイヌ民族の歴史として代々受け継いできました。

北海道のよび名
当時、北海道は、
アイヌの人たちにと
っては「アイヌモ
シリ」、和人は「蝦
夷地」と呼んでいま
しました。

交易

互いに品物などを交換し合うこと。
当時、交易していた品物は、アイヌの側から水産物（サケ、マス、コンブなど）・熊や鹿の皮・鷲や鷹の羽根などが、和人側からは、米・酒・煙草・塩・漆器類などが交易の品となっていたようです。

(3) アイヌの人たちと和人との歴史

アイヌの人たちと和人（本州から渡ってきた人々）は、自分たちの生活に必要なものを交換し合ってなかよくくらしていました。交易は、昔から行われていましたが、和人の数が増えてくると互いの生活や文化にも変化を生み出しました。

今から400年ほど前から、道南の松前付近を和人が支配するようになり（松前藩）、アイヌとの交易によって得た物を商人たちに売って収入を得ていました。

室蘭地方では、エンルム岬（絵鞆岬）の丘に交易の場が設けられました。この地方は「絵鞆場所」とよばれていました。

そのうちに、もうけの一部を松前藩に納めるという約束で、アイヌの人々との交易を商人にまかせるようになりました。そして、物々交換のきまりは松前藩の有利になるように決められたため、アイヌの人たちは、不公平な取り引きでどんどん利益を失い貧しくなってきました。

そのため、アイヌの人たちの不満はつのっていき、1669年には、シブチャリ（静内）の代表「シャクシャイン」が中心になり、全道各地のアイヌの人たちを率いて、松前藩と戦いました。しかし、松前藩のだまし討ちでリーダーを失い、アイヌの人たちは敗れてしまいました。

この後も、交易の不正やアイヌの人たちをむりやり働かせたりしたことなどが

もとで、和人との戦いがたびたび繰^くり返^せされましたが、しだいに和人たちの勢^え力は強くなっていきました。

そして、1869（明治2）年からは、蝦夷^{えぞ}地^ちが「北海道」と呼ばれるようになりました。

アイヌの人たちは山や川を奪^うわれ、川での漁^しや鹿^ゆなどの狩^り猟^{よう}ができなくなったり、農業や日本語を押しつけられるなど伝統的な生活や文化を失っていきます。

しかし、北海道には自然や生活の様子などを表現したアイヌ語地名がしっかりと生き残っています。また、先住民としてほこり高く守^ぬり抜^くいてきたすばらしい文化や伝統は、後世^{こう}に残^せしていこうとする多くの人たちの協^{きょう}力で、現在も引き継^つがれています。



シャクシャイン像

コラム 各地に残るアイヌ語の地名

道内には、室蘭市と同じように、アイヌ語がもととなって、名前がついたまちがたくさんあります。

- ・登別（のほりべつ）→「ヌプル・ペツ」（濁^どつた・川）
- ・洞爺（とうや）→「ト・ヤ」（湖^{うみ}の岸）
- ・白老（しらおい）→「シラウ・オイ」（虹^{あじ}の多いところ）
- ・壮瞥（そうべつ）→「ソー・ペツ」（滝^{たき}・川）
- ・知床（しれとこ）→「シリ・エトク」（大地^ちの・先）

もちろん、名前の起^き源^{げん}にはまだはつきり分^わからなかつたり、他の説^{せつ}があるものもあります。みなさんも図書館やインターネットで調べてみるとおもしろいですよ。

2 室蘭の^{かな}悲しい^{き おく}記憶

(1) 戦争と人々のくらし

1937（昭和12）年からの長引く中国との戦争に加えて、日本軍は、1941（昭和16）年にアメリカのハワイを襲撃^{しゅうげき}し、太平洋戦争が始まりました。

戦争がさらに長引くにつれ、室蘭市民の生活にも少しずつ悪影響^{えいきょう}が出てきました。当時の市民生活のようすを調べてみましょう。



こく い はつよう
国威発揚ポスター

生活に必要なあらゆる物が不足し、自由^{はいきゆうせい}に買うことができなくなり、配給制^{きんきゅうせい}となりました。戦争で使う金属^{きんぞく}などがたりなくなったため全国民から金属製品^{せいひん}を寄付^{きふ}させ、絵の具のチューブやアルミの弁当箱^{べんとうばこ}まで集めて使いました。幼い子ども達も、ひもじさをこらえ、「ほしがりません勝つまでは」、「ぜいたくは敵だ^{てき}」と、がまんをさせられ、苦しい生活を強いられました。



ぐん し きょうれん
軍事教練

また、食料をふやすために、小学校のグラウンドの固い土^{かた}をほりおこし、畑をつくり、じゃがいもやかぼちゃを作りました。高校生ぐらいの人は、工場^{くんれん}に働かされたり、戦いの訓練^{くんれん}をさせられたりしました。また、敵^{むか}を迎え撃^うつために、八丁平に飛行場をつくったり、高射砲^{こうしゃほう}を設けたりしました。

(2) 空襲と艦砲射撃

戦争が始まった頃は、戦場は東アジア全域におよぶ遠い南の島や中国大陸でしたが、戦争末期になると日本の国土が攻撃されるようになりました。

1945年（昭和20年）、7月14日早朝、空襲警報のサイレンが鳴りました。アメリカ軍の戦闘機があらわれ、汽車や船、工場などがつぎつぎと攻撃されました。室蘭港内では、10数せきの船が沈められました。7月15日朝には、アメリカ海軍の軍艦が地球岬の沖から、港や工場をめがけて、いっせいに大砲をうってきました。

製鉄所の被害



不発弾



砲弾跡の中島地区とその拡大写真（航空写真）

このような空襲^{くうしゅう}や艦砲射撃^{かんぱうしゃげき}によって、日本製鉄所（今の
新日鉄）や日鋼の工場がこわされ、輪西駅付近の線路
はあめのようにまがり、汽車はほとんど止まりました。
また、道路や住宅にも大きな被害^{ひがい}があり、市内のあちこ
ちで水道管がはれつし、水びたしになりました。

なくなった人は439人、ひがいにあった家が1700戸近
くありました。人々は、再び空襲や艦砲射撃におそわれ
るのではないかと心配しました。それで、荷物をつんだ
車をひいて、大急ぎで伊達や白老^{しがいち}ににげる人たちが多く、
市街地からは住民が消えて、一時は人口が減り、室蘭は
さびれてしまいました。

中島本町や八幡神社^{とうと}には、艦砲射撃で尊い命をなくし
た人々をまつる「慰霊碑^{いれいひ}」がたっています。

被害を受けた人の話

私は大沢町2丁目、立雲寺の上に自宅^{りつうんじ}があり、6人家族でした。午前9時をい
くらか過ぎた頃だったと思います。空襲警報^{くしゅうけいほう}が鳴り、小さい子ども達は町内会の
防空^{ぼうくう}ごうに避難^{ひなん}し、私と妻と長男は家から3^{つま}はなれた自分たちの防空^ひごうに避
難しました。

輪西の町は静まり返っていた時です。けたたましい爆音^{しず}で敵の飛行機が飛んで
きたのです。その時は何事もなく飛びさったのですが、まもなく、耳がはりさけ
んばかりの爆発音^{ばくはつ}が数十回も続きました。こともあろうに、その一発がわが家の
玄関先^{げんかんさき}に落ちたのです。私たち3人は、防空^{ぼうくう}ごうもろとも投げ飛ばされ、一瞬目
の前が真っ暗になりました。妻や長男に「しっかりしろ」と声をかけところ、ど
うやら生きているようす、私はぼうきれをつかんでありったけの力で土をはねの
け、外へ出る^{あな}穴を開けました。顔を出してびっくり、玄関先^{いっしゆん}を中心に直約10^{むちゅう}、
深さ5^{ちそ}ほどの穴があいているのです。私は、外へはい出し、夢中で妻と長男を
引きずり出しました。あの時の恐ろしさは、一生忘れません。



慰霊碑（中島本町）



防空壕の中のような様子

(3) イタンキの慰霊碑^{い れい ひ}

戦争中、室蘭の工場や港では、たくさんの朝鮮人^{ちょうせんじん}や中国人^{ちゅうごくじん}が、働かされていました。この人達の中には、日本軍におどされて、自分の国からむりやり連れて来られた人たちもいました。働く条件や生活が、大変きびしく、たくさん^{くろう}の人が苦しめられ、死んだり、苦勞してにげたりしました。

戦争が終わって間もないころ、イタンキ浜から白骨化^{はっこつ か}したたくさんの遺体^{い たい}がほりだされました。戦争中、室蘭の港や工場^{はね}で働かされ、病気やけがなどで死んだ人たちの骨でした。

今は、イタンキ浜をみおろす場所にたましいをまつり、世界の平和への願いをこめたピラミッド型の白い石碑^{せき ひ}がたっています。

おじいさんの話

戦争をしていたころ、鉱山や工場・港では、たくさんの中国人や朝鮮人が働いていました。この人たちの中には、自分の国^{てっほう}にいるとき、日本軍に鉄砲でおどされて、つれてこられた人たちもいました。炭坑^{たんこう}で働いていた人の半分以上は中国人、朝鮮人でした。

朝4時^{いちはん}に起こされ、そまつな食事^{こうどう}をして坑道^{がんせき}をきり開く仕事、岩石^{がんせき}をくずす仕事など一番きけん^{いちばん}なところで働かされました。夜9時半ころ仕事^{いこう}が終わり帰る時は、話もできないほどつかれていました。

室蘭には、およそ1800人の中国人が今の本輪西町、中央町、知利別町につれてこられ工場や港で原料の運搬などをさせられました。また、1942年から1944年にかけて3000人の朝鮮人がつれてこられました。

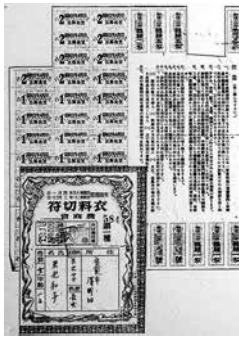
まずしい食事^{えいようしつちょう}とつらい仕事でにげ出す人もずいぶんいました。栄養失調^{えいようしつちょう}で死んだ人もいて、最後は2000人ぐらいになっていたということです。



殉難烈士の碑^{じゆなんれつし}



まずしい食事



戦時中の配給切符と
ポスター



(4) 戦争が終わる

苦しい生活

広島・長崎に「原子爆弾」が落とされ、これ以上戦争を続けられなくなった日本は、1945（昭和20）年8月15日、連合軍に降伏しました。

戦争は終わりましたが、食べる物、着る物、ねん料、日用品などすべてのものが不足していました。米や塩などは配給制で量は少なく、いつも食料を集めるのに苦労しました。そのころ中島町に住んでいた、あるお母さんが1946（昭和21）年に食料の配給とこんだてを日記に書いていました。

- 2月22日 昼食、配給のでんぶんカスのだんご
夕食、きざんだカブ入りのおかゆ
- 4月24日 米3合配給
- 4月25日 正油2・3か月分、玉ネギ、ニンジン配給
行列して1時間以上ならぶ
- 4月26日 ニシンの配給。夕食に塩味のおしるこを作る
- 5月21日 米1日分、麦2日分配給
- 6月4日 みそ、塩、配給
- 7月13日 麦5日分配給

食料が不足して、どこの家でも少しの空地、あれ地や山などをたがやして畑にし、イモやカボチャなどを作りました。

また、遠くの農家へ買いに行きました。駅で行列して切符を買い汽車に乗り、持

っていった自分の服や着物を米や野菜などに、とりかえてもらいました。このような生活を「タケノコ生活」といい、しばらく続けました。

着る物も配給制でしたから、やぶれた上着やズボンにぬのをあてて着ていました。

冬はねん料が不足して、れん炭^{たん}、オガ炭などをもやして寒さをしのぎました。

戦争^{ちやうせん}に負けたあと、カラフト^{まんしゅう}、千島、朝鮮、満州などから、たくさんの人たちが引きあげてきました。

北海道にも、たくさんの人たちがもどってきましたが、仕事が見つからず、たいへん苦しい生活が続きました。



たけのこ生活



どんなごはんを食べていたか
想像^{そう}もできないよ。

つらい生活だけど、お互い助
け合いながら、がんばってい
たんだわ。



食料の買い出しのようす

むかし調べ

時代	ち いき 地域のおじいさんやおばあさんが 生まれる前（100年くらい前）	ち いき 地域のおじいさんやおばあさんが 子どものころ（60～70年くらい前）
道具	 ※せんたく板  ※木せい れいぞうこ  電 話	 ※せんたくき  電 話  ※ラジオ
くらしのようす	・家事はお母さんが中心で、子どもたちは、家のお手伝いをよくした。 ※ 	・戦争で多くの工場がこわされ、生活に必要なものが不足した。 ・子どもたちの遊び 「竹馬 お手玉 おはじき めんこ ビー玉 けん玉 こま たこ など 」 
社会のようす	・アメリカやヨーロッパの進んだ文化が、たくさん入ってきて、くらしが大きくかわった。 ・鉄と鋼をつくる工場が室蘭にできる。	・大きな戦争があった。 ・物が足りない時期もあり、人々は協力して生活していた。

※印は室蘭市民俗資料館所蔵

ともこさんたちは、むかしの道具やくらしを調べたカード、おじいさんやお母さんから聞いたことなどをもとに年表にまとめてみました。

お父さんやおかあさんが子どものころ（20～30年くらい前）



せんたくき



カラーテレビ



けいたい電話

- ・電気せいひんがたくさん使われるようになった。
- ・子どもたちの遊び



テレビゲーム機



けいたいゲーム機

- ・新しい物や（値だ^ねが）高いものがたくさん売られ、買われた時期だった。（バブル景気）
- ・昭和^{しょうわ}から平成^{へいせい}にかわった。

年表のつくり方

- ・年表のわくを大きな時期^{じき}で分けてつくる。今回は3つの時期に分ける。
- ・左から右へ、古いじゅんにならべる。
- ・道具のうつりかわりのほかに、そのころの人々のくらしのようすや社会のようすなども書きこむ。
- ・絵カードや写真などをはって、年表にまとめる。



むかしの人のちえや努力のおかげで便利^{べんり}になってきたんだね。

くらしをよりよくしようとする人々の願^{ねが}いがあるって、道具がかわってきたんだね。

